

シンポジウム テーマ「ロータリーの心を」



志藤パストガバナー

パネリストとしてお迎えしております、九里茂三パストガバナー、安孫子貞夫パストガバナーのお二人は、地区が分割される前から私たちロータリアンに対して高い水準のロータリー活動の理念をご指導下さっておられる先生方でいらっしゃると思いますので、さぞかし感銘深いお話をお聞きすることができるのではないかと考えております。

さて、グレンW. キンロスR I会長は本年度のロータリーのテーマとして「Show Rotary Cares “ロータリーの心を”」を示されました。それを受けまして当地区の鈴木喬二ガバナーは「Study Rotary “学ぼうロータリー”」と示されております。このR Iのテーマを両先生にお話いただくわけですが、まずR Iのテーマ「ロータリーの心を」、そして鈴木ガバナーが示されております「学ぼうロータリー」について、安孫子パストガバナーからお話をちょうだ

いしたいと思っております。

安孫子パストガバナー

ただ今ご紹介頂きました、寒河江RCの我孫子貞夫と申します。かつては同じ地区でありまして、共に活動をさせて頂きました者として、大変懐かしく思います。鈴木ガバナーからも紹介がありましたが、原町の松永ガバナーの時、鈴木ガバナーと、それにコーディネーターの志藤さんもそうですが、一緒に分区代理を務めたことがありまして、それ以来親しくさせて頂いております関係上、この様な指名をなされたものと思っております。戦前の日本のロータリーと申しますと当時36クラブありまして、その中で23番目、東北で最も早く創立され昭和11年2月承認の郡山RCがございます。こうした名門クラブの系列下にある2530地区の皆さんは、私共の地区よりも遥かに高いレベルの活動をなさっておられることに、何時も敬意を表している者です。鈴木ガバナーは、地区テーマとして「学

ぼうロータリー”を掲げて力強く活動を展開しておられます。これはR Iテーマ「ロータリーの心を」を推進するに当たって、その根幹を為す心の形成についての素養を身に付けて頂き、実践に結び付けようとするもので、R Iテーマとの関連において実にタイミングのよい取り組みだと思えます。毎月の月信による“学ぼうロータリー”についての情報は実に見事なもので、私が本席で申し上げることよりも遥かに次元の高い、しかも内容の充実した情報であることに、心から敬服を致しております。こんな訳で、本日は恥をしのんで出て参りました。未熟な点は友情に免じてご寛容下さいますようお願い致します。

さて本日のテーマ「ロータリーの心を」はご案内の通り、キンロスR I会長のテーマですが、「ロータリーのつとめは、人間としてのつとめです」と、キンロスR I会長が申しているように、これは《ロータリーにふさわしい行動をなさい。あるいは、ロータリーにふさわしい振る舞いをなさい》と呼び掛けているものです。その要請内容については、昨日の本会議において朴R I会長代理が詳しく述べられましたので省略致しますが、ここでは「奉仕の実践」の基になる《ロータリーの心》について、綱領を通じて触れてみたいと思っております。

本論に入る前に、申し上げたいことの結論について予め申し上げたいと思っております。まず、キンロスR I会長と鈴木ガバナーの提唱するテーマと綱領との関係についてであります。

今年度のR Iテーマは「ロータリーの心を」を持って実践を求めているもので、綱領の3、4項に直結した考え方です。綱領3項と申しますと、一般的には社会奉仕部門と解釈されておりますが、ロータリアンの日常生活における全てに「ロータリーの心を」持って行動するように求めているもので、職業奉仕と社会奉仕の実践について書かれたものと理解すべきです。鈴木ガバナーの提唱している“学ぼうロータリー”は綱領の1、2項に属するものです。ロータリー

の原点はここにあるのです。「ロータリーのロータリーたる所以はクラブ奉仕にある」といわれるように、ロータリーにとって最も重要なことは例会を主としたクラブ奉仕活動を通じて「ロータリーの心」の形成を求めているのです。

最近のロータリーの傾向として、会員増強はともかくとしても、ロータリー財団や国際奉仕・世界社会奉仕といった団体的奉仕活動の面に入れているのが現況です。一部のロータリアンに、R Iは奉仕の実践のみを強調して、会員個々の心の形成についての指導を疎かにしていると言われる方がおられます。しかし、R Iの立場に立てば、世界社会に緊迫したニーズがある以上、それへの対応を呼び掛けるのはごく自然なこととして受け止めねばなりません。ここで注意頂きたいのは、こうした活動に参加することはロータリーの本質ではなく付随的なものだということです。ロータリーの本質はクラブ例会の中にあるのです。「ロータリーの心」を形成することが目的です。従って例会活動を通じて「ロータリーの心」を形成する事について、どれ程強調しているかどうかはクラブの責任です。何故例会があるのか、それを正しく理解していただかなければなりません。皆さんには、こうした話はあまり歓迎されないことと思っておりますが、こここのところはロータリーを正しく理解していただくために避けて通れない重要な部分なのであります。しかも、ロータリーは常に発展を致しております、従って何時も新会員がおられるものです。今日はそういう人達を対象にして申し上げたいと思っております。こうした内容は性格上いささか堅い話になることを、予めご容赦下さい。

ロータリアンにとって一番重要なことは、ロータリーとは何かという点にあると思っております。これさえ正しく理解していれば、クラブ奉仕にせよ、職業奉仕にせよ、社会奉仕にせよ、また国際奉仕にせよ、或いはルールに至るまでロータリアンが何事を行おうとするにも、余り苦勞する事なく、かなり明快に解決することが出来る

のです。ロータリーとは何かが正しく理解されていなければ、自分が或いはクラブがロータリー的だと思っけていても、その思索や行動や結果が、客観的にみてロータリー的だとは限らない。ましてや広く社会から尊敬と友愛を持って受け入れられているかどうかとなりますと、甚だ大きな疑問を感じることもなりかねません。個人においても、クラブにおいても、実際はこうしたケースが以外と多いのが実態で大変残念なことだといわざるを得ません。

さて、ロータリーとは何かということになりますが、一口で申すならばロータリーの綱領が全てであります。ロータリーの綱領は、ロータリーの真髄であり、Object、即ちロータリーの目的を表しております。だからこそ、これは同文を持って国際ロータリー定款第4条及び標準定款第3条に規定されているのです。このことは、ロータリーのありとあらゆる問題に対処していくには、我々は絶えずロータリーの綱領を持ってしなければならないことを意味します。ロータリーの綱領は御案内の通り2つの部分から成り立っております。

1つは、一言でロータリーとは何かを書いた部分で、本文であります。もう一つは、本文に対する補強原則として1・2・3・4と4項目が書かれております。これは本文を簡潔にしかも短文に納めようとする程、解釈の多様性が生じまして、実質的な意味が千差万別なものになりがちだからです。補強原則はそうした現象を防ぐために書かれたものであると理解すべきでしょう。本文にはロータリーの綱領は「有益な事業の基礎として、奉仕の理想を鼓吹し、これを育成し、とくに次の各項を鼓吹、育成することにある」とありますが、これは馴染みにくい文章ですので、次のように噛み砕いたものにしますと、かなり判りやすくなります。

ロータリーとは《企業の根底に奉仕を置くべしとする理想を、提唱することを持って目的とするクラブ活動のことをいう》となります。（ロータリーとは例会出席を通じて、企業の根

底に奉仕を置くべしとする理想を迫及し、これを提唱する事が目的である、ということになります。）これは企業の根底に奉仕があるべきことを明らかにし、そして、各ロータリアンがその理想を例会出席を通じて迫及すべきことを明らかにしているのです。これがロータリーの本質なのです。

一般の人達は、企業または労務と金銭の交換のことと考えがちです。つまり、企業とは儲けのための営みとして捉えようとする訳です。しかしロータリーはこのような平凡な考え方に対する反省を求めるものなのです。確かに損をしては企業は成り立ちません、しかし反面、儲けさえすれば何を行ってもよいというものでもないのです。企業を永続的に繁栄させるには、一個の取引が他の取引の誘因になることが望ましい、一つの商品をお客に売るときには“商品+満足”を売り、代金を受け取る際には“代金+感謝”を受け取るようにする。このような場合一個の取引に伴う人間関係の改良と申しますか、当事者間の心の交流に着目して、ロータリーはこれを《奉仕》と呼んでいるのです。これはまさに決議23-34号にあります。「利己と利他との調和」の迫及と全く同じ次元なのであります。ロータリーに置けるクラブ活動の本体はこの点にあることを綱領一言で明快に示しております。

ところで、「企業の根底に奉仕を置く」ということをもう一段掘り下げますと、企業の根底に奉仕を置くという考え方の基礎に何かがあるのか…。ということになりますが、この点について、具体的にどういう心を持ってどう対処すればよいか、その手順と内容について綱領の1・2項に述べられているのです。

綱領第1項は「奉仕の機会として知り合いを広めること」とありますが、これを判りやすく表現しますと、“心の友を得て自己研鑽のチャンスにきなさい”となります。友とはもう一人の自分である。まず友を通じて己を知ることから自己研鑽が始まるのです。会員一人一人に例

会出席を通じて善き友達を広め自己研鑽を図ることを求めているわけです。

ポール・ハリスはこのところに「親睦と奉仕の調和」が大切であると言っているのです。ここで御注意いただきたいのは、一般の社会概念では「親睦と奉仕の調和」と申しますと、例会は親睦を旨とし社会に出ては奉仕を、とそのバランスを求めているように解釈しがちですが、これは正しくありません。ロータリーは独特の社会制度をもっておりまして、「親睦と奉仕の調和」を例会活動の中に求めているのです。この場合《親睦》とは世俗から離れて楽しく心と心が通い合い、心の向上に役立ち、お互いが学びあえる教育の世界を意味し、《奉仕》とは心の形成、人格の向上を指しております。

ロータリーの標語“Service above self”とはまさにこのことでありまして、公式には「超我の奉仕」と訳されておりますが、例会出席を通じて自己改善、切磋琢磨、それから自分を分かたぬ思考を形成することです。要するに“Service above self”「超我の奉仕」とは「自己研鑽の奉仕」のことでであると解釈したほうが分かりやすいと思います。

ロータリーが出席に厳しいのは、何よりも例会を重要視しているからです。例会は一業一会員制によって峻別された良質の職業人の出会いが保障されたところであり、業種が違うゆえに企業経験が異なり、それぞれ異質の発想を持つ良質の職業人との親睦活動の中から、涵養し人格を形成していくという、教育的性格をもっております。

しかし、ロータリーは教育的チャンスを与えてくれるだけです。例会は全ての会員が師となり弟子となって、お互いの知恵を交換し合う場でありまして。従ってチャンスはその人が利用する気にならなければ何の価値も意味もないということになります。

一部の人は、例会に出席しなくても自己研鑽が出来るといわれる方がおりますが、ロータリーではこの方法を認めておりません。ライオンズ

クラブと大きく異なるところがこの点であります。従って例会活動に参加するということは《自己研鑽の目的意識を持って、定款・細則に定めるルールに従ってクラブ運営の一翼をになう》という資格がなければならないということです。さて、ロータリーの親睦は心を教育する世界だということですが、親睦を通じて何を学ぶのか、親睦の実質的内容については綱領第2に示されております。

ここでは、ロータリーの企業経営観・職業観の根本について書かれておりまして、3つに要約されます。

- ①自己の職業の社会的責任を自覚すること。（職業とは社会に貢献する為にあるとの自覚をもつこと）
- ②職業に貴賤なしとの認識を深めること。（社会に有用な職業は全て平等であるという認識をもつこと。大会社の社長も百姓の親父も平等であるということ。人の上に人を作らず、人の下に人を作らずの思考）
- ③職業の根底にある倫理基準を高めよ。（職業は契約の世界です、従ってロータリー運動は一種の道徳運動でありまして、その本体は個人倫理の確立にあるということ）

以上三点がロータリーの経営観の要約であり、職業奉仕の根底に置くべき考え方です。これを職業生活を通じて実践することを、職業における奉仕の実践といえます。自分の職業を真に社会の役に立つよう努める、これが根本的な使命であります。

以上のことを例会出席を通じて迫及していくことにより、しらすしらすのうちに「利己と利他との調和」心が涵養されていくのです。ロータリーの奉仕というのは実はこのことをいうのでありまして、その裏側に結果として“*He profits most who serves best*”があるのです。これは企業の根底に利己と利他との調和をおいて実践することにより、厚い信頼関係が広まり、利潤が長期的安定的に入ってくることを意味しています。日本古来の諺「情けは人のためなら

ず」と全く同じ次元であります。こうした思考をロータリーでは実践倫理原則として根底に置いているのです。商人は儲かって幸せになる、お客も品質を買って幸せになる。両方のバランスのとれた接点を心掛けることにより、一個の取引を通じて物と金銭を交換するだけでなく、お互いに小さな信頼関係を交換するようになる。長年にわたってこの営みを行っておりますと、地域社会に信用といわれる、一つの精神的基盤を確立することになるのです。信用の置ける商人が栄えるということは、地域社会全般がまたその反射的効果によって栄えることを意味する。ここをこのところを追及するのがロータリーなのであります。ロータリーの奉仕とはこのことなのであります。自分が行っている日常の企業経営の中に《利己と利他との調和》＝《職業という利潤獲得を目的とした利己のための活動が、どうしたら他利となるのかの反省・自他を分かたぬ思考》というものの本体とする奉仕の考え方を植え付けるものでなければならぬのです。即ちロータリーは他人の不幸の上に自分の幸せを築いてはならないのです。

以上申し上げましたことから《ロータリーの心》とは職業奉仕の精神を根底にしていることを御理解頂けたと思います。

ロータリーを学ぶということは、職業観を学ぶことであります。職業観を学ぶということは、ロータリアン一人ひとりにとって人生そのものです。ですから、ロータリーを学ぶということは、人生を学ぶことになるのです。

ありがとうございました。

志藤パストガバナー

ありがとうございました。グレンW. キンロスRI会長は「あなたの住む所にロータリーの心を。私たちの世界にロータリーの心を。そこに住む全ての人々にロータリーの心を」と私たちロータリアンに求めておられますが、それを実践するには、鈴木喬二ガバナーが地区内ロータリアンに呼び掛けておられるように、まずロータリーを学ぶこと。いわゆるロータリーの哲学

を正しく認識し、理解し、それに基づいた行動を起こすことが大切である。ロータリーを学ぶということは、例会に出席することから始まるんだということが良くわかりました。ありがとうございました。

次に良くロータリーはフェローシップとサービスであり、いわば車の両輪のようだと、先輩のロータリアンから教えられてまいりましたが、九里パストガバナーにフェローシップについてお話をいただきたいと思っております。

九里パストガバナー



皆さんしばらくでございます。私は10年前の253地区ガバナーで、福島の皆様にも大変お世話になった、それ以来なものですから、大変に懐かしく思うばかりでございます。かつてお世話になった鈴木喬二ガバナーから、わざわざ2800地区の私たち二人にこういうお役を仰せつかったわけでございますが、なるほど考えてみますと、安孫子君は鈴木君と同期の分区代理だったというんですね。それから今コーディネーターをされている志藤さんは、私の次の年度のガバナーでした。奇しき因縁と申しますか、いつまでもこのようにして繋がることの喜びを実感しております。私からは、実感として、この長い年月ロータリアンとして生きてきた体験から感じ取ったロータリーの心ということをお願いしてみたいと思うわけでございます。

今フェローシップという言葉がありました。

お互い、仲間同志という言葉でしょうか。お互い仲間同志と実感できる一つの契機と申しますか、例えば今申し上げたように、鈴木君と安孫子君が同じ時に分区代理をして、お互いに苦勞をしたという、そういう関係ですね。私と志藤さんの場合は、お互いに前の年度、次の年度ということで繋ぎ会った、そういう仲間としての共感と申しますか、たぶん皆さんもそういうものを持っていらっしゃると思うんです。ロータリーの世界では、お互いにお役を繋いでいって、そして同じような体験をして、もちろん奉仕という明確な目的をもって、その目的のために仲間を広げて行く。そこに、自然に同志的結合が生まれてくるということではないかなと思っております。

さて、大変突如ですが、昨日、私がガバナーの時、分区代理をなさった鍵谷さんの息子さん、昨日参会された方々はまぐろをごちそうになりましたが、そのまぐろの切り身を作っておられたのがその息子さんだったんですね。それでちょっと包丁を止めまして「九里先生ではありませんか」「そうです」「私は鍵谷です」とおっしゃるんです。私は実はガバナー当時の分区代理の方々と毎年のようにお会いしておったんですが、鍵谷さんは3回ぐらいお会いしただけでお亡くなりになったんです。大変残念に思いましたが、どうしようもないことであつたわけですが、昨夜その息子さんにお会いしました。そして聞きますと、彼もまたロータリアンだと言うんですよ。不思議な因縁と申しますか、本当にうれしゅうございました。また、今朝は平RC、元会長の清水さんにお会いしました。大変ご苦心された会長さんであられました。それから昨日話のあった、吉田さんの時の地区幹事は山崎さんだったんですが、彼も懐かしい顔で、お会いしました。私は同じような目的をもって苦勞をし合う、そういう人々が共感する、そういう関係から生まれる感情、これをフレンドシップと言いたいわけなんです。

そのフレンドシップですけれども、私は

「My Road to Rotary」の中のポール・ハリスのことを思い出します。彼はバーモント州のウォーリングフォードという大変な田舎から出てきて、大学を転々とするわけなんですけれど、大学を卒業してからも5年間、放浪をして歩くんです。アメリカ中、そしてヨーロッパまで足を伸ばして放浪をする。そして、そこでいろんな方に出会っては、たくさんの友達を作ってゆく。その出会う時は勿論楽しい出会いなんかではなくて、お互いに激しい労働の中で出会う。あるいはいろんな厳しい場面で出会う。私が本を読んで一番感じましたのは、ニューオーリンズの付近のミシシッピの川の或る島の所で、何人かの仲間とオレンジの実をもぎ取って箱に詰める作業をしていた時に、ミシシッピの川の水がどんどん増えてきて孤立してしまう、そんな大変な場面でお互いになんとか生き延びる手立てをしたというようなことがございましたり、あるいはロンドンに行く船の中で、入れ墨をしたような男達と船底で働きながらロンドンに行くということもありまして、大変厳しい場面でいろんな人と出会い、そして友達になるんです。このロータリー運動のスタートは、彼の非常に幅広い友人関係からはじまったということは皆さんご存知だと思いますが、恐るべき友達の数なんですね。今や我々はそういう友達をどれだけ持っているか。私はロータリーに入って、友達をたくさん作らせていただいたわけですけども、やっぱり、先程安孫子さんが例会で勉強するんだというお話をなさいましたけれど、同じ目的のもとに、互いに苦勞を共にする友達の広がりではなければならないということだと思っております。勿論クラブだけではなくて、こうして地区でも、あるいは日本全国、私なんかはもっと広く台湾とか韓国とか、あるいはヨーロッパとかアメリカとかオーストラリアとかそういった所にまで友達が広がってきました。これは本当にありがたいことなんですね。

話を少し戻しますけれど、私はこのパネルディスカッションに出るようにとのご命令をいただ

いてから、かつて10年前に書かせていただきました私のガバナー通信を紐解いてみました。一生懸命考えて書いたんだと、自分なりに思うものですから、それをちょっと読ませていただきます。『ロータリーをみんなに』という標題で「誰だって一度しかないこの人生を満身に生きたいと思わない人はいないのです。そんな人々のことを考えると、困っている人々の手を引いてあげなければならないのではないか。そのために少しテンポが遅くなっても、そのことの方が本当の幸せなのではないかと、近頃はそう思います。宮沢賢治のように世界中が幸せにならないうちは個人の幸福は有り得ないというような、到達した思想までは無理としても、例えば、おろおろしている老人や、すねて横道にそれてしまう若者たちのことを勘定に入れながら、あるいは開発途上国の極端な貧しさや、時たま大災害に見舞われた人々の身の上に思いを馳せながら、なんとか一緒に幸せをと考えることが、これからは大事なのではないか」。こんな思いを書いて、幹事さん会長さんにさしあげたことがあったことを思い出しています。それからこれはやっぱりお伝えの方がいいと思って持ってきたんですけど、実は私がガバナーになって間もなく、天童東RCを訪問したんですね。大変に活気のあるクラブでした。しかも皆さん大変にお若い。その若い会長さんに会って、彼のメッセージを読ませていただいたんですけども、なるほどなと思ったんです。こんなことを書いているんです。「リーダーと言えば、（勿論各企業のトップのことを言うんでしょ）孤独なものであります。頼るべきものは最終的には我独り。支えてくれる奥さんがいても、決断の責任はあなた一人のものです。このリーダーの集合体のロータリークラブが、互いにその孤独を癒すオアシスになれないか。また判断を下す際の情報提供の場になり得ないか。そんなロータリークラブにしたい。それが私の希望であり、夢であります。」こういうメッセージがあったんです。同じ孤独な運命にある企業のトップで

あるという認識。そして集まってお互いにほっとし合う。あるいは情報を交換して、ああそうかと思ひ合う。そういう場所がロータリーではないかと、この人は実感しているわけです。私は大変に貴重だと思いました。目の前にして志藤さんを褒めるのは申し訳ないんですが、志藤さんがこういうことをおっしゃったんです。彼はいろいろな綱領についておっしゃったんですが、「職業奉仕こそロータリーの大眼目である」と強調して、しかもそれは「日常的な我々の営みの中に実現すべきもの」と語っておられるのは、志藤さんの本領だと思います。その中で彼は一日に5分間の時間をロータリーにいただきたい。覚えていますか志藤さん。そうおっしゃったんです。「一日に5分間の時間をロータリーにいただきたい。それは一日の終りに、今日は家族に対して、社員に対して、また他人に対して、ロータリーらしい小さな親切・善意を実践できたかどうかを反省する時間だ。」と彼は言うんです。「これは志藤さん自身が実践されていることで、まったく驚きです。」と私は書きました。また今ここには書いてないんですけど、今でも私は汗をかきます。そうすると彼は度々扇子を持ってきて、「先生、これ私のかあちゃんよこしたんだ」と、そっと知らん振りしてよこすんですね。本当にこんなふうになんかのことを考えて下さる後輩なんですね。ありがたいなあと思いました。これもロータリーの心ではないでしょうか。また、こんなことも書いてあります。「会長エレクト研修セミナー」は、次の年の会長さんの勉強会であるのに、志藤さんは「来年の会長・幹事諸君、残る3か月間の九里年度を見事に充実されるよう、我々も最善を尽くして応援しよう。支援しよう。」こういうふう呼び掛けたんですね。他人への思いやりをこれほど率直に表明されたその人柄に、私は深い感動を覚えました。ありがたいことでした。ロータリーに御縁をいただいたお陰で、人の親切というものが本当にわかった。そしたらやっぱり一生懸命にお返しをしなければなら

い、こう思い続けるんですね。いつか私は永六輔の言葉を書いて、ロータリアンに差し上げたことがありました。「人が生きるということは、人様から借りをいただいていることだ。人が生きるということは、その借りを返し続けることだ」といった言葉です。そして「人は一人では生きて行けない。人は一人では歩いていけない」という、そういう言葉も書きました。そんなことで私は実感として、同じ立場あるいは同じお役、あるいは同じ目的を持った同志の中に生まれてくる友情というものを、さらに今度は、私は幸せなんだから困っている人にこの幸せを分けてあげなければならないという、そういう切実な思いに駆られる。その具体的な実践が私はロータリーの奉仕だと、私は思うんです。

志藤パストガバナー

ありがとうございました。九里パストガバナーから、実感としてのロータリーの神髄を聞いたような気がします。私どもロータリアンの憲法とも言うべきロータリーの綱領の第1に「奉仕の機会として知り合いを広めること」と示されていますように、事に触れ、他人と出会うことにより知り合いが広がり、知り合いが広がることによって自己を発見することができ、自己を開発することができ、そこから優れた奉仕の心が沸き、実践することができるんだということが、良くわかったような気が致します。

それではここで両先生が、もう少しお話ししたいことがあるんじゃないかと思しますので、今度は九里パストガバナーの方からお話をいただきたいと思ひます。

九里パストガバナー

いつの新聞でしたか「品位失う欲望の文化。アジアの精神を教訓に」というので、この人はタイのワーニット・チャルン・ピット・アナンという読みづらい名前の人なんですけれど、その方が、どうも今アジアに欲望の嵐が吹き荒れている。アジアの精神というのはもっと、そういうものと違う、高尚なものではなかったかという忠告。そういう文章を見ました。昨日も実

は朴R I 会長代理と話したんですが、私はやっぱり東洋人が今まで養ってきた東洋的な心というものを、もう一遍、学校なんかで教えなければならぬという実感がしてならないんです。例えば今日、お茶をいただきましたけれど、お茶の精神などというものも、本当に簡素の美しさ、そして人を大事にするそういうマナー。なんか心洗われる瞬間なんですね。ところが今見ていると、若者たちが物・金、そしてセックスとかが東洋の心から見ると残念でならないような、そんな雰囲気が充満していると言っているんじゃないかと思ひます。人生にとってもっと大事なものは何なのかということ、教えなくてはならないような気がしてならないんですね。

朴R I 会長代理は大変な事業家でいらっしゃるんですけど、韓国におけるいろんな社会福祉事業に、大変な情熱を傾けられておられるという話をお聞きしまして、私はうーんとうなりました。やっぱり思想が大事なんです。あるいはそれこそ自分の生活を簡素にしながら人様のために分けてあげるような、そんな生き様を、これからの若者に吹き込まなければならないんじゃないかと、つくづく感じているこの頃なんです。

志藤パストガバナー

ありがとうございました。それでは続いて安孫子パストガバナーにお願いいたします。

安孫子パストガバナー



良く職業奉仕セミナーをやりますと、社会奉仕とか国際奉仕はわかるんだが、職業奉仕がわからないという話を聞きます。そしてまた、もう少し突っ込んでくると、「利己と利他の調和の心」というものをロータリーの中でどのようにして自分のものにできるんだとおっしゃる方もいます。ここら辺までくると、かなり良い線いってるなと思うんですが、先程の社会奉仕とか国際奉仕はわかるんだが、職業奉仕がわからないというのは、綱領の精神からすれば、何もわかっていないというふうに見えるのかもしれませんが。職業奉仕の心も、社会奉仕の心も、国際奉仕の心も、全てロータリーの職業観が根底にあってのことだよというふうにご理解いただくと、もっと進んだ考え方をすることができるのかなというふうに思います。そういう基本的な心が備わっていて、そして異なるのは、行為の相手方によって、相手が職業関係の人であれば職業奉仕だよ。相手が地域社会の人々であれば社会奉仕だよ。そして国際的交流の中での実践であれば国際奉仕だよということなんですよ。だから現象的に地域社会あるいは国際社会の千差万別なニーズに対応していく、そこのところだけが違うんであって、根底にある心というのは同じだよ。ロータリーの心というのは同じなんです。その辺をご理解いただきたい。

R I のテーマとの関係の中で職業奉仕をどう理解すべきかということなんですが、ロータリーの職業観の形成は、例会出席から始まるんだよということなんです。最近のロータリーで由々しきことは、例会出席が大変おろそかにされつつあるということです。都市部の例会場に行きますと、他からメーキャップされるお客さんは、ほとんど昼飯を食べると早退をされる。何のためにロータリーに入っているのかわからない感じで、ましてやホームクラブの中でさえ、そういう方が結構多いということです。例会そのもの、ロータリーの原理原則が稀薄になってきており、形骸化しつつあるということでもあります。

どうもその辺がおろそかにされていると思われる節もあるんです。

R I のテーマというのは、ほとんど表に向かっての実践行動を要求いたしています。ガバナーや会長がそのテーマを受けて、ロータリーの中でそれをなんとか体現しようと努力するわけです。そうすると、ロータリークラブの本質的なものが置き去りにされつつある。やはりR I が何を言おうと、どんなことを提唱しようと、当然対応しなければならない問題ではありませんけれど、それはそれとして、それ以上に我々はロータリークラブの例会がなんのために行われているのかという本質をもう少しきちんとわきまえていかないと、ロータリーはおかしくなってしまうと思います。特に最近のクラブ運営を見ますと、古く歴史の中で培われてきた、文章になっていない約束ごとですよ、そういうものがどんどんなくなりつつあります。

例えばクラブ運営の中でフォーラム、年間4回以上行いなさいと言われてます。そうしますと、そのクラブフォーラムを昼間の例会時間の30分で終わらせてしまうんですよ。こんなことでフォーラムなんてやれるはずがないんですよ。だいたい2時間くらい掛けないと、本当の意味でのフォーラムなんてできないんです。それがたったの30分。それも例会時間に取り組んで終わってしまう。アセンブリー（協議会）もそうなんですよ。普通、アセンブリーというのは、例会とは全く関係ないところで行わなければならないことになっています。しかも30分そこから終わるはずがない。2時間くらい掛けないとだめなんですよ。ここでお考えいただきたいことは、会員が例会に出席すること、ほとんど通常の例会では発言する機会はありません。年間52、3回の例会時間ですので、25、6時間しかないわけで、その時間をいかに次元の高いものにしていくかという心構えを、きちっとしていただかないと、例会そのものが非常に中身のないものになるということです。中身がないと会議はつまらないんですよ。退

会はそこら辺から起きてくるんです。したがって会員みんなが話し合えるチャンスというものをきちっと例会の中に取り組んでいただきたい。フォーラムとかアセンブリーがすることなんです。どちらも内容は異なりますけれども、会員が意見を言える場があります。そしてそういう場所を活用して、みんなから発言をしてもらうことによって、ロータリアンとしての自覚が生まれてくるんですね。そしてそこが最大の情報交換の場なんです。

それと大事なことは、会長自身がリーダーとしての責任をおろそかにしてはならないということだと思います。一番大事なのは会長なんです。しかし、全ての会長が十分な能力を持っているとも思いません。そうした場合は、理事会がそれを補佐するだけの器量・度量をもって機能を発揮するように段取りをしなければならない。会運営の最高責任は理事会にあるということの責任を果たさなくてはならないということなんです。会長・クラブの質は会長がどの程度のロータリー思想を認識し、実行しているかに象徴される。まさにこのことなんです。したがって例会をどこまで質を高めることができるかの調整をしていただきたいということです。つまらない例会はやらないようにしてください。ただしあまりぎすぎすになってはだめですから、親睦と奉仕の調和がいかに大切かということを根底に祈いなさい。いろいろな話し合いの中で、意見の対立は当然出てくるんです。それはロータリアン一人ひとりがみんな違う意見の持ち主ですから当然のことなんです。その当然のことを当たり前なこととして受け止めていかないと、クラブ運営はうまくいきません。意見が対立したら、相手がどのような考えを持ってそうした意見を言っているのかを知るだけで十分なんだよと、ポール・ハリスは言ってるんです。これが寛容の精神なんですよ。それがまた親睦と奉仕の調和の精神なんです。おおいに議論をしよう、それを大事にしていきたいと思います。本当にクラブフォーラムもアセンブリーも古い

時代からロータリーを勉強する場として設けられた部分であるということをおろそかにしないでいただきたいと思います。

ロータリーの職業観の形成は例会出席から始まるということですが、中にはこういうことをおっしゃるかたがいます。職業奉仕なんて難しいことじゃないよ。職業を通じて社会に奉仕することなんだと、気軽におっしゃるかたがいます。しかし、職業を通じて社会に奉仕しているのは、ロータリアンだけでしょうか。ここで少し思いを深めていただきたいのです。世の中にとって有用な職業に限定する限り、あらゆる職業人が社会に貢献しているという事実を正しく認識しなければなりません。職業を通じて社会に奉仕しているのは、何もロータリー特有のことではないのです。ロータリアンでないほうがよっぽど質の高い貢献をしているかもしれません。ロータリーでは職業奉仕をロータリーの金看板としております。それは職業奉仕がロータリーの活動の中心となっていることを意味しております。広く社会一般の方々が職業を通じて社会に奉仕することと、ロータリアンのそれとは、どんな違いがあるんだろうか。そのところを突き詰めていただきたいのです。ロータリーは他の社交団体にはない固有・独自の哲学と組織倫理を持っております。それを理解することなしに職業を通じて社会に奉仕することだと言っても、その行動はロータリーの思考尺度とは似ても似つかないものになりがちなのであります。ロータリーの固有・独自の哲学とは、なんでしょうか。もちろん綱領に記されていますけれど、これまで先達がいろいろ苦勞して理論提唱を致しております。そういうことを大いに勉強していただきたいということです。そうすることによって、職業奉仕の精神を理解する速度が加速度的に早くなるということです。大事なことは、ロータリーの原点を知り、そこから変化と成長の歴史的いきさつの中でロータリーの綱領、ロータリーの標語「Service above self」そして「He profits most who

serves best」、それから職業倫理訓。社会奉仕に関する1923年の声明、いわゆる決議23-34号等の成分規範の生成過程の意味するところを知り、徐々に体制化されてきた組織原理を理解することが大事だよということです。そういうわけで先達がたくさんの思想を残してくれています。1919年頃から1927年頃までの非常に短い間の中でロータリー思想が大成されたと言われています。その頃のロータリーの歴史を勉強していただければ、ロータリーのすべてが理解できるのかなと思います。クラブの中でのそういう勉強を大事にさせていただきたいということです。

志藤パストガバナー



ありがとうございました。ポール・ハリスはロータリーは「奉仕と親睦の調和による心の様相である」と言っておられますが、最近のロータリーはややもすると奉仕にのみ進みすぎて、「親睦を通じて友情を深めることができ、そこからすぐれたアイデアが生まれ、それをロータリアン個人個人が、またクラブとして行動を起こすことによって地域の発展につながり、世界の平和につながる」ということが、どうも影が薄くなっているのではないかなというふうに私は心配をしているわけですが、今日両先生は、ロータリー運動の基本についてお話くださいました。地区内ロータリアンは、両先生のこのお話を心の大きな指針として、今後のロータリー活動に

生かし、鈴木喬二ガバナーはすばらしい年度にする自信が沸いたのではないかなというふうに思います。

両先生には、本当に感銘深いお話をいただき心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

司会者

それではご質問をお受けします。ご質問のある方は、挙手の上、所属クラブ名、ご氏名を述べられてご質問ください。尚、その場で結構でございます。係りの者がマイクをお持ちいたしますので、よろしく願いいたします。どうぞマイクの係りの方をお願いします。

東白川RC・三本松

三つほどお尋ねしたいことがございます。今年公式訪問の時に鈴木ガバナーがおいでになりまして、スピーチの中で会員増強はロータリーの永遠のテーマである。宿命であるとおっしゃいました。今九里先生がフェロウシップについてお話なさいましたけれど、その観点から会員増強についてお尋ねをしたいと思うのですが、会員増強というのは一方で退会をする人がいるから会員増強が必要なのではない、または国際ロータリーの財政基盤をしっかりとしたものにするためにあるのではないかと私は思うんです。何か根底にしっかりした理論の裏打ちがあるはずだと思うんですが、私自身そのことがしっかりとつかめておりませんので、ご教示をたまわれればと思います。

それから安孫子先生にですが、どうも最近ロータリーを難しくするなという議論があるのを時々耳にします。今年地区のテーマとして「学ぼうロータリー」とされたことは、私はもろ手を挙げて賛成なんです、そのことについて、どのような手立てをしたらロータリーを効果的に学べるか、具体的な方法があればと思います。

それからもう一つ。出席というのが、どんなに大切かという話を安孫子先生がなさいましたが、それが実にロータリーの根底であるというふうに、私も共感を覚えるんです。来年の1月

の規定審議会に提案される議案の内容を見ますと、例会は月に2回にしようとか1回にしようとかの提案がありまして、たぶん否決されるとは思うんですが、万が一それが通ってしまった場合、標準ロータリー定款というのは改定されるはずなんです。それに対するクラブの対応というのは、これは標準クラブ定款ですから守らなくてはいけないんですけど、どういうふうにしたらいいのか。例えばうちのクラブは毎週1回例会をやるんだというようなことでもいいかどうか、そんなことをお尋ねしたいと思います。

志藤パストガバナー

それでは会員増強について九里パストガバナーの方からお願いします。

九里パストガバナー

会員増強の件ですね。あなたのお考えの通りだと思うんですが、私が度々申し上げてきたことは、自分がロータリーに入って、こんなにいろんな意味で啓蒙され、私の人生観が深まり、そして視野が広がってきたという喜び、その喜びを人様に分けてさしあげないではいけないという、そういう気持ちとしてのお誘いでなければならぬと思います。自分がロータリアンとしてこんなに幸せに、こんなに有益に生きているんだという実感からでのお誘いでなければ、逆に失礼だと思いますよ。そういう意味で、まず自分がロータリアンとしての喜びを本物にすること、そしてそれを本当に分けてあげたいと思うこと、そんなことが私は原点だと思います。

志藤パストガバナー

それでは、安孫子パストガバナーお願い致します。

安孫子パストガバナー

なにかクラブの雰囲気、理屈っぽい話は避けるという雰囲気です。結構そのようなクラブが多いんです。なぜでしょうか。それは普段のロータリー活動、例会を含めてでございますけれど、非常に次元が低いからだと言えるかもしれません。きちっとした心の改善をするこ

とに非常にまじめに取り組んでいるクラブがたくさんあります。ですから心の改善をしていただくほかにあります。そして、どうやってそれをやるかということになりますと、まず一番早いのは、各委員会ごとに夜の時間でもいいから、委員長宅に晩飯をごちそうになりにもいいから、時々集まっていた。いわゆる昔の言葉でいう、ファイアースイドミーティングです。そういうことを通じてロータリー情報を流し、心の交流を持って改善をはかる以外ないのかなと思います。例会だけでは難しいと思います。皆さんの心の繋がりを深めていただく他ないと思います。それから例会回数を減らせというのが世界の流れのように感じます。そして審議会にそういう提案がたくさん出されています。しかし、もし毎週1回の例会がどこかで脱落するようなことになったら、それで、RI定款細則、ロータリー標準クラブ細則が変わるかもしれません。しかし、それは一つの最低のルールなんだよと認識すれば、それ以上の例会の開催についてRIが色々言うことは絶対ないと思います。ですからそれは各クラブの中で決めていただいていたいいのではないかと、私は思っております。たぶん例会が毎週でなくなるということは、おそろくないだろうと思います。心配いらぬと思います。

それからついではございますが、規定審議会の中で、綱領の第5番目に教育的性格を盛り込めという提案が3~4つあったと思います。これは綱領の1番、2番目に教育的性格が含まれていることを理解していないのかなというふうに感じております。おそらくそれもあまり意味のないことだろうと私は思っております。

志藤パストガバナー

ありがとうございました。

司会者

大変恐縮ではございますが、ご質問はこれまでとさせていただきます。

志藤パストガバナー

それではここで九里パストガバナーから一言

お願いいたします。

九里パストガバナー

昨日、朴R I 会長代理とお話をしているうちに、私たちの大先輩、あるいは歴史上の人物が、ロータリーと同じようなことをいろんな形で言っているという話から、桜井パストガバナーお得意の二宮尊徳の推譲の話なんかも出ました。私、実はこの会に参上するに際して、そういう昔の人の言葉を書いてきたんですよ。ちょっと読ませてください。これは北条泰時の言葉。「人貧しき時は、物の善悪も良くわきまえ、よろず道正しけれども、富貴になりては、奢りて知恵の鏡も失せ、人の指差すようになりぬ。去る程に仏はこれを悟りたまいてか、人の富貴を祈れるをば大方叶えたまわぬようなるは、このいわれにやとおぼゆる」と言うんですね。朴R I 会長代理、記念にこれをお持ち帰り下さい。もう一つですね。これは今の人の言葉です。三浦綾子「人が好んで後に残る物は、集めたるものにあらず。与えたる物である。」です。これはコーディネーターの志藤さんに差し上げます。どうぞ。

志藤パストガバナー

それでは、朴R I 会長代理、恐れ入りますがご登壇いただけますか。

朴R I 会長代理

ただ今フロアからのご質問と内容のお答えに合うかどうかわかりませんが、ちょうど今日のシンポジウムのテーマが「ロータリーの心を」ですので。「学ぼうロータリー」というのは、やっぱりロータリーを学んでこそロータリーの心をみんな良く理解し合おうと。理解し合うということは、今、九里パストガバナーもおっしゃったように、我々ロータリアンというのは大きい小さいの形は別として、一つの独立した企業を持っている。そしてそこで一番孤独なものはリーダーである。その孤独の運命のリーダーの集まりがロータリークラブであると。そこで我々が自分の職業を通してもっとりっぱな地域社会を作ろうじゃないかというようなことではないか

と思います。

もう一つ質問の中で思い出したことなんですけれど、私はソウル西RCの者です。友人で国会議員を3回当選して4選目に落選しまして、本人もお寺にいたり、いろいろ精神的に苦しい時に私が行って、クラブに入会させたんです。その後、あの人はこの前の選挙で当選して、しかも今国会議長になられた。そしてその人は、私はロータリアンになったから国会議長にまくなったと、本人はそういってます。その人はロータリアンになったことは非常に名誉である。自分の人生の新しい思想、新しい理念、新しい理想を築き上げたと、本人は非常に喜んでいるということが一つです。

昨年10月ですけど、実は私、会社の株を日本円で6億5千万くらい社会団体に寄付したんです。昨日の会長・幹事会でも話しましたが、私は何も無い、畑一つからこの仕事を始めたんです。そして今これだけの有形財産があるということは、やはりこの社会から得たものだから、社会に返さなければならぬと。社会に返すには、全部返してもいいくらいなんですけど、まずこれだけ、有形の物を返そうと思ったのです。今日着ているこの服ですが、実はこれは2~3週間前に、家の近くのデパートのチラシが入ってきて、既製服が30%オフになっているから行きましょうと家内に言われて買ったんです。普通、洋服屋さんで眺めると100万オン、13万くらいするんですけど、これは日本円で2万3千円くらいかな。私はこの方が気楽で、高い服で汚れが付きちゃう心配はいらぬし、そういう面で気楽な生活をしています。ありがとうございました。

志藤パストガバナー

朴R I 会長代理、本当にありがとうございました。

会場みなさん、長い間ご静聴ありがとうございました。ここで最後に、両先生に心から感謝の大きな拍手をお願いしたいと思います。

—拍手—